

年始にやって来て話して行った、そして暮の目黒の競馬で佐々木摩山水と二人で馬券を買って百四十円づつ儲かったと元氣だった、その摩山水は嫁さんを貰ひに九州佐賀へ暮から旅行してゐるなどと話して行った、今年は何となく、年らしい氣がする即ち、元日から儲かった話、結婚の話、何れも人事ながら聞いて愉快だ、(中略)

暮といへば暮の二十三日に珍らしく帝国ホテルの演芸場へ出掛けを見た、例の「露地の細路」を藤蔭会の藤間静枝が振付けしたといふので切符を送られたからだ。ゆつくり出かけたんで、肝腎な露地の細路は終りの方を一寸しか見なかつたが、くだらないものだった、由来私は童謡は聴衆の前で公然唱つたり振など付けるものでないといふ考へなんだが、案の定だったので不愉快と同時に愉快だった、然し静枝の踊りは巧いものだった。その帰りに新橋駅から電車にのつたが、あの辺のさびれやうはなかつた、当時は当時だけに一寸身のけもよだつといふ氣がした、そして電車ののりこみが狂氣の沙汰だ、しかもその中にやはり美服をまとひ脂粉の顔をさらした女たちも交るのだから、物ずさまじい。この状態が四五年続いたら東京の女達は狼になるだらう。

暮に、そちらから上京した水巴先生に逢つた、先生夫妻は十一月から大阪府下豊中村といふ処に住んでゐる、従つて曲水は大阪から出てゐる、一般の書店へも出るさうだから、序があつたら本屋で見えてくれ、新年号以来何かか、書いてゐるから。先生の話で、大阪辺も郊外の生活は随分いゝらしい、そのうちに一度そちらへも行つて見たいと思つてゐる、大阪には曲水社があるし神戸には曲水支社がある。二三日前萩間から名物芋きりぼしを澤山送つてくださった大変においしくて盛んに昨日から賞味してゐる。

今年は初ちゃんも女学校を出るし、春樹も多分中学へ入るだらう、

おひく／＼にみんなが大きくなる。私もいよく自信がついた、今年には文壇へ打つて出られやうと思ふ、そして今年の暮にはもう少しどうかいふ家へ越して、鬼が笑ふかもしれないが来年の春はもっと愉しくもつとめでたい年を迎へやうか——と考へる。今年のはじめの手紙、それを雑然とお前へ宛て、書いた鈴木氏へよろしく

■(大正13年)三月十七日夜

神戸市外西灘村鍛冶屋字岸地三十四ノ二

鈴木三千代宛(平安無事)

二人とも御達者の由、それが何より、一昨日から、独りぼつちになつてゐる、亮之助が大葉さんの令息の受験について静岡へ行つたからだ、まだ二三日は帰るまい。その代り静岡の家はここ数日一寸賑かだらうと思ふ。

お父さんは伊豆でお変りもない。ただ右の腕が時々痛んでいけなかつたさうだが、それも法蔵寺の和尚さんから、何か塗薬を送つてくれて、それで軽快された由、(中略)伊豆もこの頃寒いさうだ、東京も今月に入つてからまた冴返つてなかく／＼の寒さだ、だから二十日まではお帰りがあるまい。

たつた一人ぼつちといふのはのんきでいゝ。由来私は孤独といふ事が人一倍好ましいのだが、しかし横着者だから、あんまり長くなると困る、そこらがちらかるし汚れてしまふ。しかし一生に一度は、ほんとに誰にも離れてたつた一人ぼつちといふ生活も半年ばかりはやつてみたいと思ふ。

昨夜は小田島が遊びに来てくれた。六時頃から来て十二時半まで